夏期司書講習『映像資料特論』のアンケートから見る講習生の映画への関心度の分析（2004～2006まで）

衛　藤　賢　史

はじめに

筆者が、別府大学の夏期司書講習で担当する科目は『映像資料特論』である。２日間にわたって８コマの講義をする選択教科のひとつで単位数は１単位である。

この講義の成績評価はレポート課題であるが、1998年（平成10）からレポート課題と併せて受講生にアンケート調査に協力してもらう事にした。依頼した項目は８項目である。

①今まで映画館で見た映画の中から好きな作品を、なぜ好きなのか若干のコメントを添えて５本あげてください。

②映画館で見なくてＶＴＲやＤＶＤで見た好きな作品を５本あげてください。

③映画館で年間に何本くらい映画を見ますか。

④ＶＴＲやＤＶＤで年間に何本くらい映画作品を見ますか。

⑤ＴＶの番組ではどのジャンルを見ますか。

⑥ＴＶで感銘を受けた番組があったら教えてください。

⑦映画館の設備でこうして欲しいと望むところがありますか。

⑧この講義に関しての感想をコメントしてもらえますか。また講義の内容の他に知りたかった事項があれば述べてください。

という項目であるが、受講生の皆さんからそのすべてに丁寧な回答をいただいたのは大変うれしかった。

この中で⑧に関しては授業評価の一環として入れて筆者の次期以降の授業改善の参考にしたいと考えていたのだが、色々と示唆に富んだ回答をいただいて予想以上の収穫があった。

この⑧を除いた①～⑦までの項目を挙げた目的は、受講生が視覚メディアである映画とＴＶにどの程度関心を持っているかをまず知りたかったのと、映画とＴＶを同じ視覚メディアとして内容を並列的に見ているのではないかという不安感があって調べてみようと思ったのが主たる動機であった。

しかし、受講生の回答によって映画とＴＶの内容を並列的に見ているのではという心配は、アンケートの①②と⑤⑥の内容を詳細に読み比べて見た結果、受講生が両メディアの性格の違いをよく熟知したコメントの回答をしている事から、まったくの杞憂におわった。

そこで今回は⑤⑥の項目には触れずに①②③④⑦の映画に関する項目を、受講生の回答からデータ整理し、未来に繋ぐ若い受講生たちがどういう映画を好んでいるのか、映画館とＶＴＲ・ＤＶＤなどで見る作品をどのように選り分けているのか、見る量と質の両方から比較、さらに映画館に対してどのようなサービスの要求があるのかなどを分析していく事にする。

なお、枚数の都合で本論は2004年から2006年までのデータで年度毎に述べていく事にしたい。

（1）アンケートから見る受講生の映画への関心度と傾向

2004年（平成16年）

① 映画館・ビデオでの鑑賞頻度

この年次の受講生は74名である。

アンケートの「映画館で年間に何本くらい映画を観ますか」に回答してくれた受講生は73名である。本数の内訳は下記のようである。

10	15	2	3	6	7	3	3	10	0
4	3	12	3	6	12	4	1	10	2
3	6	10	2	3	0	10	6	15	15
6	15	5	6	10	2	6	15	36	5
1	6	15	6	20	0	6	10	15	0
10	2	0	2	3	10	3	0	2	10
20	12	4	10	5	3	4	2	3	16
3	2	6							

平均すると ＜6.96回＞ という結果になった。

アンケートの「ビデオで年間に何本くらい観ていますか」に回答してくれた受講生は71名である。本数の内訳は下記のようである。

20	10	5	5	40	90	15	30	36	0
20	10	10	10	16	5	12	10	25	15
15	80	20	2	15	30	10	130	20	30
8	15	15	150	20	10	50	3	40	15
10	50	20	30	100	2	40	10	13	50
60	0	40	3	20	100	15	5	10	10
10	60	8	15	10	50	20	20	20	20
50									

平均すると年間 ＜27.22回＞ という結果になった。

②アンケート調査①②③④による総合的分析

2004年次の受講生が回答した＜映画館で1年間に見る映画＞回数の平均は6.96回である。

この年次の日本の映画界の年間入場者数は1億7009万人(注1) であり、これを日本の人口（大雑把に1億2300万人とする）(注2) 比率から換算すると一人当たりの平均回数は1.31回という事にな

り受講生は平均の 5.3 倍の回数を映画館で映画を鑑賞している計算になる。

さらに、回答してくれた 73 名の受講生の内 25 名が、年間 10 本以上の作品を映画館で見ており、受講生の映画の関心度は高いと考えていい。

また、映画館で見た好きな作品への回答は 71 名であり、受講生がそれぞれに挙げた作品のタイトル数は全部で 197 本であった。

その中から 5 名以上の受講生が好きな作品として挙げた映画を多い順に列記する。

①『もののけ姫』	(日本)	1997	＜15 名＞
②『ラスト・サムライ』	(アメリカ)	2003	＜10 名＞
③『千と千尋の神隠し』	(日本)	2001	＜ 9 名＞
④『ロード・オブ・ザ・リング』	(アメリカ)	2002	＜ 8 名＞
⑤『HERO ／英雄』	(中国)	2002	＜ 6 名＞
⑤『少林サッカー』	(香港)	2001	＜ 6 名＞
⑤『シックス・センス』	(アメリカ)	1999	＜ 6 名＞
⑧『ジュラシック・パーク』	(アメリカ)	1993	＜ 5 名＞
⑧『スター・ウォーズ』	(アメリカ)	1999	＜ 5 名＞
⑧『アメリ』	(フランス)	2001	＜ 5 名＞

以上の 10 作品が 2004 年度の受講生が好きな映画として支持したと考えていいだろう。

なお、受講生が挙げた 197 作品の内、50 作品が日本映画であり、圧倒的に外国映画の支持率が高くなっている。

次に＜ＶＴＲ・ＤＶＤで見た好きな映画作品＞の回答は 73 名であり、受講生がそれぞれに挙げた作品のタイトル数は全部で 247 本であった。

その中から 4 名以上の受講生が好きな作品として挙げた映画作品を多い順に列記する。

①『ショーシャンクの空に』	(アメリカ)	1994	＜10 名＞
②『天空の空ラピュタ』	(日本)	1986	＜ 6 名＞
②『レオン』	(フランス)	1994	＜ 6 名＞
②『風の谷のナウシカ』	(日本)	1984	＜ 6 名＞
③『バック・トゥ・ザ・フューチャー』	(アメリカ)	1985	＜ 5 名＞
④『エリン・ブロコビッチ』	(アメリカ)	2000	＜ 4 名＞
④『ローマの休日』	(アメリカ)	1953	＜ 4 名＞
④『紅の豚』	(日本)	1992	＜ 4 名＞

以上の 8 作品が 2004 年度の受講生が好きな映画作品として上位に支持した作品となっている。

これを見ると映画館で見た作品よりも年代がかなり古くなっている事が分かる。

特に 1953 年に製作された『ローマの休日』がランクされているのは、ＶＴＲやＤＶＤが近年各都市で姿を消しつつある名画座の役割を引き受けている様子が伺える。

なお、受講生が挙げた 247 作品の内、51 作品が日本映画であり映画館で見る作品と同様に外国映画の支持率が高い。

また、映画館の設備に関しての要望では、座席への改良の要求が大変多いのが印象的である。その内訳を見ると、座席の幅を広くして欲しいという要求が 22 名から出ており、隣の席との間隔が狭いので、隣りに他人が座った時、気になってゆっくりと映画鑑賞が出来ないので改良して欲しいとの要求が 15 名、さらに前列の座席を含めてリクライニングの装置が出来ないかという要求が 10 名、両腕を置ける座席への要求が 5 名など、満席に近い状態の時に生じる困惑への不満がある。

この改良は効率を重んじるシネコンの映画館などでは経費がかかり過ぎる、という事で一笑に付される要求かも知れないが、サービス産業の映画界としては、このような観客側からの要求を真剣に考慮すべき問題点であると考えてくれる事を期待したい。

その他としては、長時間椅子に座ると足がむくむので、簡単な足置きを取り付けて欲しいという要求と、ブランケット・サービスが出来ないかという要求が女性の講習生から 6 名出た。

この設備に関しての要望は 2005 年、2006 年とも、ほぼ同じような要望であることから、2004 年のみにする。

2005 年（平成 17 年）

・映画館・ビデオでの鑑賞頻度

この年次の受講生は 82 名である。

アンケートの「映画館で年間に何本くらい映画を観ますか」に回答してくれた受講生は 81 名である。本数の内訳は下記のようである。

2	3	5	6	2	2	5	2	2	1
3	4	1	45	7	5	5	5	4	2
3	8	10	0	3	5	3	3	0	2
2	3	10	6	5	2	20	0	4	3
6	1	3	10	5	3	0	3	6	5
6	10	4	3	10	10	20	24	10	20
1	20	20	0	5	3	0	5	7	2
3	3	0	10	2	10	5	3	20	7
2									

平均すると ＜5.97 回＞ という結果になった。

アンケートの「ビデオで年間に何本くらい観ていますか」に回答してくれた受講生は 82 名である。本数の内訳は下記のようである。

10	13	10	20	3	3	20	10	3	5
5	12	50	20	5	20	18	15	20	5
20	15	48	0	25	50	8	10	5	24
10	25	30	15	10	2	70	1	120	10
30	5	6	50	15	30	2	2	12	80
30	12	8	20	20	50	50	20	30	20
30	10	40	20	10	5	70	10	20	3
20	30	0	40	12	40	10	100	40	20
20	5								

平均すると年間 ＜20.41 回＞ という結果になった。

②アンケート調査①②③④による総合的分析

2005 年度の受講生が回答した ＜映画館で 1 年間に見る映画＞ 回数の平均は 5.96 回である。

この年度の日本の映画界の年間入場者数は 1 億 6045 万人(注3) であり、これを日本の人口から比率換算すると一人当たりの平均回数は 1.30 回という事になり、受講生は平均の 4.5 倍の回数を映画館で見ている計算となる。

さらに、回答してくれた 82 名の受講生の内 15 名が、年間 10 本以上の作品を映画館で見ているが、この数は昨年度生より 9 名多くなったとは言え、多い数とは言えない。

また、＜映画館で見た好きな作品＞ への回答は 81 名であり、受講生がそれぞれに挙げた作品のタイトル数は全部で 194 本である。

その中から 5 名以上の受講生が、好きな作品として挙げた映画を多い順に列記する。

①『もののけ姫』　（日本）　1997 ＜17 名＞
②『千と千尋の神隠し』　（日本）　2001 ＜13 名＞
③『ハリー・ポッター』　（アメリカ）2001 ＜12 名＞
④『スター・ウォーズ』　（アメリカ）1999 ＜ 9 名＞
⑤『ロード・オブ・ザ・リング』　（アメリカ）2002 ＜ 7 名＞
⑤『タイタニック』　（アメリカ）1997 ＜ 7 名＞
⑥『オペラ座の怪人』　（アメリカ）2004 ＜ 6 名＞
⑦『踊る大捜査線』　（日本）　1998 ＜ 5 名＞
⑦『パイレーツ・オブ・カリビアン』（アメリカ）2003 ＜ 5 名＞
⑦『ブリジット・ジョーンズの日記』（イギリス）2001 ＜ 5 名＞

なお、受講生が挙げた194作品の内、45作品が日本映画であり、この年度も前年同様外国映画の支持率が高い。

次に ＜ＶＴＲ・ＤＶＤで見た好きな映画作品＞ の回答は82名であり、受講生がそれぞれに挙げた作品のタイトル数は全部で268本であった。

その中から４名以上の受講生が好きな作品として挙げた映画作品を多い順に列記する。

①『ショーシャンクの空に』	（アメリカ）	1994	＜10名＞
②『ニュー・シネマ・パラダイス』	（イタリア）	1989	＜ 7名＞
②『アメリ』	（フランス）	2001	＜ 7名＞
③『ローマの休日』	（アメリカ）	1953	＜ 6名＞
③『風の谷のナウシカ』	（日本）	1984	＜ 6名＞
⑥『天空の空ラピュタ』	（日本）	1986	＜ 6名＞
⑥『耳をすませば』	（日本）	1995	＜ 6名＞
⑦『魔女の宅急便』	（日本）	1989	＜ 5名＞
⑦『天使にラブソングを』	（アメリカ）	1992	＜ 5名＞
⑧『となりのトトロ』	（日本）	1988	＜ 4名＞
⑧『猟奇的な彼女』	（韓国）	2001	＜ 4名＞
⑧『パイレーツ・オブ・カリビアン』	（アメリカ）	2003	＜ 4名＞
⑧『カサブランカ』	（アメリカ）	1942	＜ 4名＞
⑧『七人の侍』	（日本）	1954	＜ 4名＞
⑧『アルマゲドン』	（アメリカ）	1998	＜ 4名＞
⑧『ライフ・イズ・ビューティフル』	（イタリア）	1998	＜ 4名＞
⑧『バック・トゥ・ザ・フューチャー』	（アメリカ）	1985	＜ 4名＞

これらの作品の内訳を見ると、2000年以前の作品が11作品を占め、さらに1940～1950年代の代表的な作品が３本あり、受講生のＶＴＲ・ＤＶＤでの作品選択が映画館で見逃した新作に限らず、旧作品の中の秀作をも視野に入れた幅広い選択をしている事が分かる。

なお、受講生が挙げた268本の内、50作品が日本映画であり、ここでも外国映画の支持率が高いという結果が出た。

2006年（平成18年）

・映画館・ビデオでの鑑賞頻度

この年次の受講生は70名である。

アンケートの「映画館で年間に何本くらい映画を観ますか」に回答してくれた受講生は70名である。

本数の内訳は次頁のようである。

6	2	2	5	3	3	12	5	4	3
1	10	5	7	20	10	0	10	2	6
3	10	20	10	2	5	5	10	24	2
5	8	2	3	0	5	5	5	2	5
3	20	4	20	20	0	1	1	3	6
3	1	6	2	120	10	6	1	2	8
3	5	6	20	3	0	2	12	3	2

平均すると ＜7.57 回＞ という結果になった。

アンケートの「ビデオで年間に何本くらい観ていますか」に回答してくれた受講生は 67 名である。本数の内訳は下記のようである。

20	30	5	10	100	20	50	4	15	10
10	10	30	10	12	100	100	3	12	10
10	20	30	10	15	70	10	5	15	15
10	5	10	10	8	30	5	12	30	30
50	60	10	15	20	40	50	60	6	40
20	100	10	20	6	5	12	60	6	24
25	40	5	2	30	5	1			

平均すると年間 ＜23.46 回＞ という結果になった。

②アンケート調査①②③④による総合的分析

2006 年度の受講生が回答した ＜映画館で 1 年間に見る映画＞ 回数の平均は 7.5 回である。

この年度の映画界の年間入場者数は 1 億 6427 万人(注4) であり、これを日本の人口比率換算すると一人当たりの平均回数は 1.33 回という事になり、受講生は平均の 5.7 倍の回数を映画館で見ている計算となる。

さらに、回答してくれた 70 名の受講生の内 17 名が、年間 10 本以上の作品を映画館で見ており、数的には多いとは言えないが、年間 120 本という受講生がいたので平均回数が多くなっている。

また、＜映画館で見た好きな作品＞ への回答も 70 名であり、受講生がそれぞれに挙げた作品のタイトル総数は 181 本である。

その中から 5 名以上の受講生が、好きな作品として挙げた映画を多い順に列記する。

① 『千と千尋の神隠し』　(日本)　2001　＜14 名＞

② 『もののけ姫』　(日本)　1997　＜12 名＞

③ 『ロード・オブ・ザ・リング』　(アメリカ)　2002　＜10 名＞

④ 『ハウルの動く城』　(日本)　2004　＜　9 名＞

⑤『オペラ座の怪人』　(アメリカ)　2004　＜　7名＞
⑥『パイレーツ・オブ・カリビアン』(アメリカ)　2003　＜　6名＞
⑦『ハリー・ポッター』　(アメリカ)　2001　＜　5名＞
⑦『スター・ウォーズ』　(アメリカ)　1999　＜　5名＞

なお、受講生が挙げた181本の内、50本が日本映画であり、わずかであるが、この年度生が率的にはいちばん高い。

次に ＜ＶＴＲ・ＤＶＤで見た好きな映画作品＞ の回答は70名であり、受講生がそれぞれに挙げた作品のタイトル総数は247本であった。

その中から４名以上の受講生が好きな作品として挙げた映画作品を多い順に列記する。

①『となりのトトロ』　(日本)　1988　＜6名＞
①『風と共に去りぬ』　(アメリカ) 1939　＜6名＞
②『風の谷のナウシカ』　(日本)　1984　＜5名＞
②『ローマの休日』　(アメリカ) 1953　＜5名＞
②『天使にラブソングを』(アメリカ) 1992　＜5名＞
③『スター・ウォーズ』　(アメリカ) 1999　＜4名＞
③『グリーン・マイル』　(アメリカ) 1999　＜4名＞
③『アイ・アム・サム』　(アメリカ) 2000　＜4名＞
③『耳をすませば』　(日本)　1995　＜4名＞

これらの作品の内訳を見ると、＜映画館で見た好きな作品＞ 同様、アメリカと日本の作品のみに上位の支持が集まっている。

なお、受講生が挙げた274本の内、52作品が日本映画であり、３年間の年度毎の作品総数と日本映画の本数がほぼ一定の数字を示しているのは興味深い現象である。

おわりに

2004年から2006年の３年間のアンケートによる司書講習生の回答を基に年度毎に分別して①②③④を分析して見た結果、映画館での鑑賞、ＶＴＲ・ＤＶＤでの鑑賞両方にわたって日本のアニメーション、特に宮崎駿の支持層が多い結果には正直驚いた。ある程度の予想はあったのだが、これほど熱狂的な支持が集まるとは思っていなかったので、改めて日本のアニメーションが若者たちの知的文化として定着している事をデータ結果から知らされたと言っていい。

それは宮崎駿の他に『耳をすませば』(近藤喜文)『おもいでポロポロ』『火垂るの墓』(高橋勲)『クレヨンしんちゃん』(原恵一)『ＡＫＩＲＡ』(大友克洋) などのアニメにもトータルとしてかなりの支持が入っている事からも伺える。

映画館鑑賞のデータとしてはハリウッド系の娯楽大作に支持が集まっている事に少し寂しさを覚えるデータ結果となった。

それに比べてＶＴＲ・ＤＶＤ鑑賞では『ローマの休日』などに支持があり、その他にも『風と共に去りぬ』『七人の侍』『カサブランカ』『ニュー・シネマ・パラダイス』など古い名画が上位にランクされ、質的価値の高い作品に対しての鑑賞への興味がある事が判明したのはうれしい結果であったが、これは安い料金でリバイバル上映をする単館系の映画館の減少が、ＶＴＲ・ＤＶＤでこれらの作品を見るしかない現代の状況を反映していると見ていいのではないか。この事は、前述したように映画館で鑑賞する回数とＶＴＲ・ＤＶＤで鑑賞する回数に大きな差が生じている事でも裏付けられる。

実は⑧のアンケートでこの事に関して大きな示唆をいただいている。

2004年には講義の中に作品鑑賞として『独立愚連隊西へ』（1960）を、2005年には『モダン・タイムス』（1936）を、2006年には『赤ひげ』（1965）などの古い作品を見せたのだが、この3作品にへの受講生の評価は大変高かったのである。

『独立愚連隊西へ』では「驚くほど面白かった！」「白黒映画ははじめて見たが、こんなに面白い物とは思わなかった」「古い作品を敬遠した自分が恥ずかしい」「邦画にもこんなに楽しい作品があるとは」「これからは古い映画も見てみたいと思った」など実に43名の受講生からのコメントが寄せられたのである。

『モダン・タイムス』では「チャップリンの映画ははじめてだったが、映画館で見たいと強烈に思った」「現代にも通じる深いテーマを面白く見せるチャップリンの才能にたまげた」「古い作品はつまらないという先入観を持って映画を見ていた自分を反省した」「こんな作品を上映してくれる映画館を切望する」「いい作品は時代を超えて存在しつづけると思った」などの賛辞と共に、映画の歴史に興味を持ったという受講生が52名もコメントを寄せてくれたのである。

また『赤ひげ』においては、53名の受講生から高い評価のコメントが寄せられ「長さも白黒も忘れてひたすら映画に見入った、黒澤はすごい！」「黒澤を毛嫌いしていたが、映画を見る事もせずに勝手に決め付けた自分の愚かさを恥じる」「我を忘れてひたすら見入ってしまった、黒澤のすごさを知った」「黒澤監督が世界で尊敬されていると言う意味が分からなかったが、はじめて黒澤の作品を見ていっぺんに大ファンになってしまった、こんな人物が日本人である事を誇りに思いました」「こんな古いいい作品を上映してくれる映画館を切望する」「日本映画の存在は宮崎さんだけと思った自分は浅はかだった、黒澤監督のテーマは普遍性を持っている」「はじめて映画の力はすごいと心から思った」「古いいい映画を沢山見たくなりました」など興奮にも似た賛辞の声が沢山寄せられた。

これらのコメントは実は大きな示唆を与えているのではないだろうか。

それは映画という視覚的なメディアの若者たちを啓蒙する大きな力の在り方を汲み取り、それを認知させる作業としての教育システムの必要性を示唆していると筆者は考えるものである。

注１　『キネマ旬報』2005／２月下旬号　P146
注２　端数を省いた人口であるので2005・2006も同じ数字を使用する
注３　『キネマ旬報』2006／２月下旬号　P171
注４　『キネマ旬報』2007／２月下旬号　P178

（えとう　けんし　別府大学教授）